

〈講演紹介〉

中華民国史研究

——現在と過去との対話——

山田 辰雄

本稿は2014年6月21日、愛知大学国際問題研究所、愛知大学国際中国学研究センター、愛知大学現代中国学会、中国現代史研究会の共催により開催された、山田辰雄先生講演会「中華民国史研究——現在と過去との対話」の概要である。
(編集委員会)

* * *

中華民国史研究は近代中国の政治全体を対象とし、現在と過去との対話という観点から話をする。

歴史的事実とは歴史家が自らの価値に基づいて選択したものである。その意味で、歴史は現在の問題に照らして過去をみるものであり、現在と過去との対話である。

問題の選択は、目前の一時的なものではなく、その中に普遍的な問題が含まれていなければならない。



山田辰雄先生
(慶應義塾大学名誉教授)

本日は、私がこれまで学界に提起した4つの問題領域から話をする。
1. 中国国民党左派の研究と中華民国史の提唱。2. 日中関係の150年。
3. 1989年の天安門事件と歴史的連続性。4. 蒋介石研究がそれである。
これらの問題について現在と過去との対話という観点から説明する。

1. 国民党左派の研究と中華民国史の提唱

1960年代から70年代に問題となったのは革命史観であり、中国近代史を国民党または共産党を中心として評価することであった。

この革命史観に対し、日本の研究者は反発して中華民国史という分野を提示した。それは国民党や共産党だけで中国近代史を語るのではなく、他の政治勢力を同じ目線でとらえ、その政治路線や相互関係を解明するものである。その中で国民党左派も浮かびあがってきた。

民国期の政治構造は、軍閥、国民党、共産党が、独自の軍隊と支配領域を持つという特徴があった。一方、国民党左派は軍事力や大衆組織の基盤が弱く、既存の軍隊や大衆組織を操作することで政治的地位を維持していた。

中国革命は国民党と共産党に二極分化し、この構造の中で国民党左派は中間勢力であった。よって国民党と共産党の間には共通の要素が存在し、それは党の指導性と大衆の動員であった。この視点は現代中国の政治を見る上で重要な問題を提起している。

現実の政治過程から離れた政治思想、運動は存在せず、中間勢力の評価では政治思想と政治過程との相互作用を見なければならぬ。

2. 日中関係の150年

近代の日中関係史は中華民国史の重要な一部であるが、歴史認識問題をめぐり常に対立が起きている。

私は、1990年代から世界各地で、日中関係の会議を組織することに参加した。これらの会議を通し、各国の学者たちの意見は対立しながらも相互理解が進展しており、日中戦争、歴史問題を研究する国際的なコミュニティーが出来上がりつつある。

1993年に慶應義塾大学地域研究センターが開催した日中関係の国際シンポジウムで、私は日中関係の150年を提唱した。150年とは日中関係の出発点をアヘン戦争まで遡ることであり、日中関係を多面的にみるという提案である。アヘン戦争の時期の日中関係には対立と相互依存の側面が



講演に聴き入る参加者

あった。中国がアヘン戦争に敗れたことは明治の開国の大きな要因であり、19世紀末の戊戌の変法、このモデルは日本の明治の政治体制であった。

日本は中国を侵略したが、両国の間には競争しつつ戦争に至らないという状況が存在している。この側面を「競存」と呼ぶ。日中関係には長期的観点から将来に繋がる見方が必要である。相互依存、「競存」、敵対という3つの側面を設定し多面的に見ていく必要がある。

日中関係を考える上で、文化交流、経済交流が盛んになることで、日中関係が安定するという幻想があった、両国関係を安定化させるためには、安全保障と歴史認識問題を解決する必要がある。創造的に新たな和解の道を探らなければならない。

3. 1989年の天安門事件と歴史的連続性

天安門事件における民主化運動は、なぜ武力鎮圧されたのか、この問題は天安門事件だけでなく歴史的連続性の中で理解する必要がある。

鄧小平は、中国の安定的な政治発展は、上からの指導によらなければならないと考えた。そこでは党の指導権確保が重要になる。よって党の指導権に挑戦し、市民的立場から政治改革を行うことは許されない。

民国期の中国では、軍閥、国民党、共産党は独自の軍隊と支配領域を持ち、議会のような政治的利害対立を調整する制度が欠けていた。この状況で対立する勢力と妥協すれば、自らの存立基盤を喪失する。よって政治的

な対立は容易に軍事対立に転化する。中国の指導者たちは、市民の民主化要求を対立する敵対勢力と断定し軍隊を投入した。私はこの政治指導を「代行主義」と呼んでいる。「代行主義」とは上からの指導であり、市民の政治参加が許されないことである。

台湾が民主化したことは画期的なことであり、蔣経国が民主化を上から決断をしたことは重要である。これは現在の中国共産党政権が変わることを想像した場合、一つのヒントになる。この「代行主義」的な連続性は重要である。今の共産党指導者たちも、共産党の支配は変わらざるを得ないと考える時期が2020年頃には来るだろうと、私は考えている。

4. 蔣介石研究

蔣介石研究では、現在と過去との対話の中で普遍性を持つ問題の選択が重要である。一つは、蔣介石に代行主義的政治指導が一貫して存在していたことである。彼の政治指導を解明することは、近代中国政治史全体の中で、蔣介石をどう位置づけるかという問題が含まれ、上からの決断が民主化に結びつくという問題も含まれている。

また、政治家の権力と道徳の問題がある。興味深いのは蔣介石が日記の中で非常に感情的なこと、禁欲的なことを書いている点である。この感情的、禁欲的な側面を現実の政治とどう結び付けるかが、蔣介石研究の重要な課題である。

さらに、日中関係の中の蔣介石という問題がある。蔣介石は若い時に日本に留学しており、それは彼が外の世界を知る上で大きな出来事であった。また彼は、日本との戦争の指導者であった。蔣介石の日本との関係には、一面では学習、そして屈辱、勝利という、愛憎両面の感情が存在する。この蔣介石の経験は、近代中国の指導者に共通するものであった。

最後に

中国は「実験国家」である。中国には13億の民がおり、従来の社会科学には13億の民を統治する理論は無い。2～3億の民を統治する理論は

存在するが、そこでは社会経済の発展が民主化をもたらすという漠然とした考え方がある。社会経済の発展を考えると、中国13億の民が日本や米国のような発展をするには莫大なエネルギーが必要であり、それを確保することは困難である。つまりわれわれは出来ないことを前提として、中国が発展し民主化することを要求していないだろうか。

「実験国家」中国が、人類の発展にとり有利な発展をするのか、不利な成果をもたらすのかが問題である。中国に限られた資源の中で発展するには、より効率的な社会メカニズムを創造しなければならない。そうでなければ資源を求めて対外膨張し、それを支える軍事力の強化、環境悪化、という結果をもたらすかもしれない。我々は中国の政策において、「実験国家」として何を生み出すかという点に注目しなければならない。